# ザンビアの食料生産

## ●70年代の浮沈●

児玉谷史朗

### 1　ザンビア農業の特質

米国農務省が発表した『サハラ以南アフリカにおける食料問題と展望：1980年代』は，サハラ以南アフリカが過去20年にわたって１人当り食料生産が低下してきた唯一の地域であることを指摘している。しかしこの１人当り食料生産の動向も国別にみると，いくつかの異なったパターンを示している（この点については『アジ研ニュース』1985年５月号所収の「サハラ以南アフリカの食料問題」を参照されたい)。そのなかでもザンビアは特異なパターンを示している。上記報告書に示された70年代についての指数によると，ザンビアの１人当り食料生産指数は1976年までは相当の高率で増加したが，76年以降は逆に急激に低下し，79年には70年の水準に逆戻りしてしまう（グラフ参照)。

この問題に入る前にザンビアの農業生産の基本的特質について述べておこう。まずザンビアの場合，食料生産指数と農業生産指数にほとんどずれがない。60年代後半から70年代の時期においては各年とも農業生産指数と食料生産指数はせいぜい１ポイントの差しかない。つまり農業生産の動向と食料生産の動向をほぼ同一視しても大きな誤りはないといえる。ザンビアの農業には食料作物以外の作物の生産としてめぼしいものがないからである。また，ザンビアには輸出用作物といえるほどのものはない。全輸出に占める農業輸出の割合は1964年に2.3%，74年に1.4%にすぎなかった。したがってザンビアの農業生産は基本的には国内消費向け食料生産だといっても過言ではない。

ザンビアの農業のいまひとつの特質は，大規模商業的農業と伝統的な小規模自給農業という二重構造をなしていることである。大規模商業的農業は，近代的で資本集約的な大経営を行ない，農業出荷額の約半分を占める。小規模農業は家族労働を基礎にする自給農業であるが，近年小規模農民のなかから新興農民 (emergent farmers) と呼ばれる商業的農民が興隆してきた。したがって現在のザンビアの農業の担い手は，大規模商業農民，新興農民，小規模自給農民の三つの層からなっている。

ザンビアの食料生産の変動パターンの要因を探る際に，最初に注目すべきことは，１人当り食料生産とトウモロコシの出荷量の変動パターンが類似していることである(グラフ参照)。ザンビアではトウモロコシは市場向け食料作物として圧倒的な地位を占めており，モノカルチャーといってもよいくらいなのである。農産物出荷額に占めるトウモロコシ出荷額の割合は，1970年前後には65%以上，70年代半ばには80%近くにも達した。したがってトウモロコシ生産の動向が食料生産の動向を大きく左右していることは十分考えられる。そこでまずトウモロコシの出荷量の変動を規定した要因を探ってみよう。

### 2　食料危機

現在のアフリカにおける食料危機，農業危機が旱魃等の天災によるものなのか，農業政策の失敗

等の人災なのかがよく議論される。実際には農業生産の変動に影響を与える要因として自然環境，政府や援助機関の政策，農村の社会的・経済的変容，農業技術の変化等多くのものが存在し，しかもそれらが相互に関連しあっていると考えられる。

よく問題とされる旱魃や天候の要因を最初に検討してみよう。ザンビアの農業も他の多くのサハラ以南アフリカ諸国と同様に天水農業である。ザンビアでは降雨が不確実であり，乾期が長いにもかかわらず灌漑はほとんど行なわれていない。灌漑面積は7700ヘクタールにすぎず，しかもこのうち6500ヘクタールはザンビア砂糖会社の砂糖キビ農場である。ザンビアのトウモロコシ作付面積が50万ヘクタール前後であることを考えると灌漑はないに等しいことがわかる。

トウモロコシの生産は特に旱魃の影響を被ってきた。70年代では1973年，79年，80年にトウモロコシ出荷量が大きく落ち込んでいるが，いずれも雨不足の年であった。1972/73年のシーズンは雨量不足のうえ，雨が不規則であったために，特にトウモロコシと棉花が打撃を受けた。1978/79年のシーズンは旱魃に近い状態で，雨の降り方も不規則だったため，トウモロコシと落花生の生産が影響を受けた。1979/80年のシーズンも雨季に雨が降らず，トウモロコシは作付面積が増加したにもかかわらず雨量不足でヘクタール当り収量が低下したために生産は落ちこんだ。

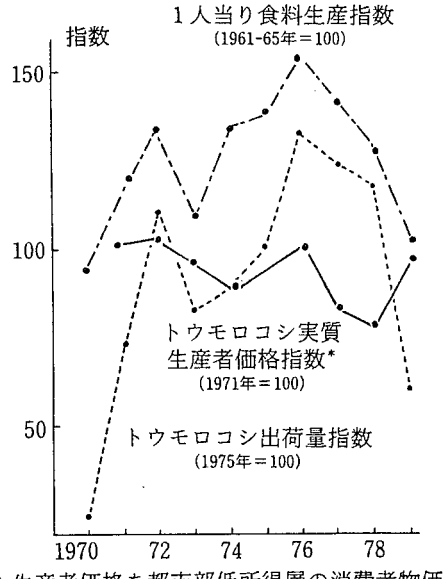
このようにザンビアのトウモロコシ生産は天水農業であるため旱魃の年にはその影響が直接的かつ明瞭に生産量の低下となって現れたのである。しかし天候要因は一時的な生産の落ち込みの原因ではあっても，長期的な生産の趨勢を説明する要因ではない。また後に述べるように1973，79，80年のトウモロコシ生産の落ち込みも旱魃が唯一の原因だとはいえないのである。

## 3　トウモロコシ生産の価格要因

次に生産者価格など農民へのインセンティヴ(誘因）とトウモロコシ生産との関連を検討してみよう。

世銀が発表した『サハラ以南アフリカの加速的開発』のなかでは，アフリカ諸国の政府が農産物価格をはじめとして，十分なインセンティヴを与えなかったために農民が生産意欲を失ったことが農業危機の要因として重視されている。農民へのインセンティヴとしては価格インセンティヴと非価格インセンティヴにわけて考えることができる。ザンビアでも他の多くのサハラ以南アフリカ諸国

**ザンビアの１人当り食料生産指数とトウモロコシ出荷量指数**




＊生産者価格を都市部低所得層の消費者物価指数でデフレート。

（出所）U.S.Dept. of Agriculture, *Food Problems and Prospects in Sub-Saharan Africa,* p. 3 ; Zambia, *Economic Report 1973* ; R. Chambers and H. Singer, "Poverty, Malnutrition, and Food Insecurity in Zambia"より作成。

と同様に，主要農産物の価格と流通は公的に統制されている。マーケッティング・ボードと呼ばれる公的な流通機関が流通を独占し，生産者価格，消費者価格は政府公定価格となっている。トウモロコシの流通はナムボード（National Agricultural Marketing Board）が扱い，トウモロコシの買付価格は1972年から全国統一価格となった。トウモロコシの生産者価格は，1968/69年から71/72年にかけて引上げられ，73，74年とすえ置かれたが，74年までは総じて小幅の価格修正にとどまっていた。その後1975年に16%，76年に26%引上げられ，さらに，78年に8%，79年32%，80年30%，81年15%というように毎年大幅に引上げられた。しかし70年代半ば以降は消費者物価や農業投入資財の値上がりも激しくなったことを考慮せねばならない。農村部の生計費指数や農業資財のコストについては統計がない。そこで都市部低所得層の消費者物価指数によってデフレートした数値およびトウモロコシと衣類の交易条件を手がかりとしてトウモロコシの実質生産者価格の大まかな動きとみなすことにする。デフレートした生産者価格はグラフに示したような動きを示した。また衣類とトウモロコシの交易条件はトウモロコシ販売者の側からみて70年代を通じて全体として悪化したが，1971年から72年にかけてと74年から76年にかけては交易条件が好転した。1976年から78年にかけては著しく悪化した。これらの動きをトウモロコシ出荷量の動向と比べてみると両者の関連はかなりはっきりしているといえる。トウモロコシ生産者は価格インセンティヴに敏感に反応してきたといえよう。

## 4　他の誘因の影響

次に非価格インセンティヴとして重要なものに化学肥料に対する政府の補助金がある。これは化学肥料の価格の一部とその流通費用を補助するもので，1971/72年に開始された。補助金の額は1971/72年には300万クワチヤであったのが，80/81年には4300万クワチヤに達した。化学肥料に対する補助は1973/74年から78/79年の時期にトウモロコシの生産者価格の25～35%に相当したので，インセンティヴとして重要なものであったと思われる。特に化学肥料を多く使う近代的大規模商業農民にとってトウモロコシ生産を拡大する重要な誘因となったといわれる。化学肥料に対する補助金の4分の3は大規模商業農民向けであった。大規模商業農民によるトウモロコシの収穫面積は1969/70年と70/71年の平均5万ヘクタールから1974/75年と75/76年平均の8万3000ヘクタールへと増加し，生産量も同じく217万袋から386万袋へと増加した。

しかし70年代後半には化学肥料補助金が続けられ，生産者価格も引き上げられたにもかかわらず商業的農民によるトウモロコシ生産は停滞してしまう。1979年，80年には明らかに他の要因がトウモロコシ生産の低下をひきおこした。すでに述べたようにこれらの年には旱魃の影響があった。さらに1979年には南部における戦争のために農業用の投入資財や部品の供給が途絶したり価格が高騰した。この最後の点は近代的農業投入財や農業機械に依存する度合の高い大規模商業農民の農業生産に大きな影響を与えてきた。ザンビアは内陸国であるために貿易・輸送が周辺諸国との関係，周辺諸国の情勢により大きな影響を受けてきた。そのうえ銅モノカルチャーともいえるザンビア経済は銅の輸出価格の低迷によって外貨事情が容易に悪化する。このような貿易・輸送ルートの不安定や外貨事情の悪化による農業資財の供給不安定はザンビアの農業生産の動向を左右する重要な要因である。化学肥料の輸入は1977年と78年に激減し

た。1975年に15万トン，76年に17万トンあった化学肥料の輸入は77年には6万トン，78年には4万トンに落ち込んだ。投入資財や部品の欠乏が農業生産に影響を与えたことは1973年にも起こった。この時は当時少数白人支配下のローデシア(現ジンバヴェ)との国境を閉鎖したために農業資財のコスト上昇や重要な資財の欠乏をきたした。

## 5　トウモロコシ以外の作物生産

以上のようにザンビアの食料生産の基軸をなすトウモロコシの生産の動向には，天候，生産者価格，肥料補助金，農業投入財の供給等の要因が複合的に作用しているのである。では次にトウモロコシ以外の食料作物の生産動向はどうなっているであろうか。トウモロコシ以外の作物の生産の変化のパターンは70年代には大まかにいって二つに分けられる。ひとつはトウモロコシの場合と同様に，1人当り食料生産指数と同じパターンを示すものであり，具体的には落花生がこの部類に入る。もうひとつは1人当り食料生産と異なるパターンを示すもので，これはさらに米，小麦，砂糖キビ，大豆のように新しく70年代に生産が広まり，その後順調に生産が増加したものと，ソルガム，ミレット(ヒエ類)，キャッサバのように出荷(生産)量が停滞，減少の傾向にあるものとにわかれる。

米，小麦，大豆，砂糖キビはザンビアでは70年代に入って生産が本格的に行なわれるようになったもので，いずれも70年代と80年代初頭に順調に出荷量が増加した。米の出荷量は1971～73年には170～405トンであったが，80年前後には約2500トン，83年前後には5000トン以上に増加した。小麦の出荷量も1975年には934トンにすぎなかったが，81年には1万1000トン以上に達した。いずれもザンビア政府が食料自給達成のために国内生産を奨励した結果で，出荷量の増加は単純に作付面積，生産者数の拡大によるものである。米の作付面積は1978/79年から81/82年にかけて1.9倍に，小麦の作付面積は77/78年から81/82年にかけて2.3倍に増加した。しかし作付面積，出荷量が急速に増加したといってもこれらの作物の比重は食料生産のなかでは依然として小さい。1981/82年に至っても米，小麦，大豆の合計作付面積はトウモロコシの作付面積の30分の1にすぎない。したがって食料生産全体の動向がトウモロコシ生産に大きく依存するという基本的特質を変えるまでには至っていない。

米，小麦等とは逆にソルガム，ミレット，キャッサバの生産は停滞している。これらの作物は伝統的な自給作物であり，現在でも小規模自給農民にとっては重要な作物である。しかし自家消費用としても市場向けとしてもしだいにトウモロコシに代替される傾向にある。これらの作物の生産・出荷量の統計は不完全であるが，ソルガムの出荷量は1969/70年の約12万袋から77/78年には2万1000袋に減少した。ミレットの生産量も70年代の初めに200万袋前後あったのが，1977/78年には約50万袋に低下したと推計される。

以上にみてきたようにザンビアの食料生産の動向は基本的にはトウモロコシの生産に規定されており，それは天候，農民へのインセンティヴ，農業資財の供給といった要因に複合的に影響されてきた。しかし同時に70年代を通じて米，小麦，大豆，砂糖キビ等の新しい食料作物の生産が増加しており，他方ソルガム，ミレット，キャッサバの生産は停滞しているので，食料生産の内容も徐々に変化してきたといえる。

(こだまや・しろう／調査研究部)